The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「従三十三天降下」図の図像
Author(s)	肥塚, 隆
Citation	待兼山論叢. 美学篇. 1978, 11, p. 29-48
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48124
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「従三十三天降下」図の図像

肥　塚　　隆

I　はじめに

「従三十三天降下」の物語は、「三道宝階降下」とも呼ばれ、仏陀が雨期の3ヵ月間、三十三天（忉利天 Trayastriṁśa-deva）に昇り、そこに再生していた母の摩耶（Māyā）夫人のために説法した後、三道の宝階を伝って Saṁkāśya に降下したとするもので、多くの経典などに説かれているきわめて有名な説話である。また釈迦の一生を8つの大きな出来事で代表させて図示する釈迦八相図の中の1つにも数えられているように、この説話を主題とする浮彫や絵画は、「誕生」「降魔成道」「初転法輪」「涅槃」の四大事や「出城」に次ぐほど数多く、しかも地域的にも時代的にも広範囲にわたっている。

ところが、この「従三十三天降下」あるいは「三道宝階降下」の名で包括されている仏伝図の図像は、説話のどの部分に重点を置くかによってかなりの差異があることも事実である。小稿は、この仏伝図の図像を分類し、主としてインドにおけるこの図像の種々相を明らかにしようとするものである[1]。

II　説話の内容

「従三十三天降下」の伝説については、『雑阿含経』巻第十九（大正蔵経第2巻 p.134）の記述が最も単純で、原初的な形態をとっている。それによれば、「四衆（男女の出家者、男女の在家信者）が、尊者大目犍連に夏安居中の世尊の住処を尋ねたところ、三十三天で母および三十三天のために説

法しておられるということであったが、夏安居が過ぎても世尊の姿がないので、大目犍連に三十三天に昇り世尊の降下を願ってほしいと頼んだ。大目犍連の要請に応じた世尊は、夏安居の終った7日後に、僧迦舎城の優曇鉢樹の下に降り、天竜鬼神や梵天がそれに随った」とするものである。ここでは、三道宝階のことも、仏陀を迎えた人々のことも、まったく触れられていない。しかし同経巻第二十三（大正蔵経第2巻 p.169）には、如来が天上で母に説法し終って僧迦奢国に下った時、優波羅(Utpalavarṇā)比丘尼が転輪聖王を化作したと記されている。

また *Divyāvadāna*（p.401）は、仏陀の三道宝階降下のことには触れず、『雑阿含経』巻第二十三とほぼ同趣旨のことのみ述べている。

『増壹阿含経』巻第二十八は、仏陀の三道宝階降下と Utpalavarṇā（蓮華色）比丘尼の話を同一個所で述べ、しかもその記述は相当詳しくなっている（大正蔵経第2巻 pp.703－708）。すなわち、「自在天子が金、銀、水精の三道を化作し、金道が中央にあり、水精道と銀道の側をはさんで金樹を化作した。梵天（Brahmā）は如来の右側の銀道を、釈提桓因（Indra）は水精道を降下した。優鉢華色比丘尼は、国王大臣人民よりも先に世尊の姿を拝そうと考え、転輪聖王に姿を変え、世尊の前で元の姿に戻り、世尊の足に礼拝した」[(2)]と説き、その間に、Udayana（優塡）王が牛頭栴檀の仏像を作ったという話まで挿入されている。この『増壹阿含経』とほぼ同じ内容の説話は、『義足経蓮花色比丘尼経』第十四（大正蔵経第4巻 pp.184－186）などにも見える。

また、5世紀はじめにインド旅行をした法顕の旅行記は、「優鉢羅比丘尼が皆に先んじて仏を拝した。仏が忉利天より下る時、仏は中道七宝階を、梵天王は白銀階を、天帝釈は紫金階を下った。三道宝階は地に没したが、なお7段は地上に現れていて、阿育（Aśoka）王はその根元を知ろうとして掘らせたが、黄泉に至ってもなお尽きなかった。王はますます敬信し、階

上に精舎を建て、中階に丈六の仏像を作り、精舎のうしろに高さ20肘の石柱を立て、上に師子（の柱頭彫刻）を作った」（『高僧法顕伝』大正蔵経第51巻 pp.859－860）と述べている。7世紀前半にインド旅行をした玄奘もSaṁkāśyaを訪ね、次のように記している。「伽藍の大垣内に三宝階があり、南北にならび、東に面して下っている。如来が三十三天より降還されたものである。中階は黄金、左が水精、右が白銀で、如来は中階を下られ、大梵王は白い払子を手に執って銀階を、天帝釈は宝傘を持って水精階を下った。数百年前はまだ階段があったが今はなくなってしまったので、諸国の王が煉瓦や石で、もとの場所に昔の宝階を擬して作った。高さ70余尺ある。上に精舎を建て、中に石仏像あり、左右の階段に梵天、帝釈の像がある。かたわらに無憂（Aśoka）王の建てた石柱があり、上に師子が階段の方を向いてうずくまっている」（『大唐西域記』巻四、劫比他国の条、大正蔵経第51巻 p.893）と。

以上のような経典その他の記述によれば、三十三天での説法とUtpalavarṇāの礼仏とは別系統の説話であったことも考えることができる。そのうち時代の経過とともに説話が増広され、三道宝階が導入され、Utpalavarṇāの話が附加され、さらにはUdayana王造仏の話なども挿入されるようになったのであろう。Udayana王造仏の話は、1世紀末にGandhāra地方で仏像が造り始められたのち、造仏が一般化した時代に語られるようになったことは明らかである。しかし、それ以前のこの「従三十三天降下」の三十三天での説法とUtpalavarṇāの礼仏とは別個の説話であったとも考えることができるであろう。時代の経過とともに両者は結合し、さらに三道宝階の化作やUdayana王の造仏の話がつけ加えられて、『増壹阿含経』に説くような形式に発展したのであろう。

仏像はGandhāra地方で1世紀末頃に作りはじめられたとするのがほぼ定説化しているから、Udayana王造仏の話は、造仏が一般化した2世紀以

後の成立と考えるべきである。また三道宝階は、この仏伝図の最古の遺品である前1世紀初頭のBhārhutの欄楯柱のそれに図示されている。Utpala-varṇā が三十三天から降下する仏陀を真先に拝したという話は、次節で述べるように、3世紀には図示されていたことは明確であるが、どこまでさかのぼることができるかはっきりしない。このような説話の発展と相まって、下天の地Saṁkāśyaは仏教徒の巡礼地として重要性を増していった。法顕の記述によれば、5世紀はじめには、仏陀を中尊とし、Brahmā（梵天）へ・Indra（帝釈天）を両脇侍とする三尊仏がその精舎の本尊となっていた。

ところで、Saṁkāśyaは、現在のU. P. 州Farrukhābādの西方約30kmのSankisāという村に比定されている[3]。Pakhnā駅から馬車で約30分のこの小村には、ストゥーパ趾らしいマウンドがあり、僧院趾ではないかと思われるレンガ遺構もわずかに地上に露出しているが、まだ組織的な発掘は1度も行なわれていない。ただAśoka王時代と推定し得る柱頭彫刻が発見されて、ストゥーパ趾近くに安置されているのは注目に値する。これは蓮華の鐘状柱頭の上に厚い円盤をおき、その上に足をふんばって立つ象を乗せたもので、鼻と尻尾を欠いている。柱頭彫刻はライオンであるとする法顕、玄奘の記事との矛盾はまだ解決されていない。

III 遺　品

1 古代初期

仏伝図や本生図で飾られた最古の遺品であるBhārhutのストゥーパの欄楯柱（前1世紀初頭）の1つに、すでに「従三十三天降下」の図（fig. 1）がある。画面中央に3筋の階段を垂直に表わし、古代初期の慣例通り仏陀

の姿を表現するのを避けて、階段の最上段と最下段との輪宝を印した足跡によって仏陀の降下を象徴している。階段のむかって左には聖樹があり、その手前には縁から花輪の垂れる傘蓋と、花で飾られた方形の台座とがある。聖樹と傘蓋は水平の視点から捉えられているのに、台座は斜め上の視点から描かれていて、Bhārhut の浮彫の古拙さを示している。このひと組の聖樹、傘蓋、台座は、地上に降り立った仏陀の象徴であろう。階段や聖樹などを囲んで21人の在俗の信者たちが仏陀を迎え、上方では3体の神々が散花するなどして仏陀を讃えている。

古代初期のもう1つの例は、Sāñcī 第1塔の塔門（1世紀初頭）にある（fig. 2）。ここでは階段は1筋のみで、踏板に足跡を印さず、そのかわり階段の上下に聖樹と台座とを表わす。周囲の人物は、ある者は合掌し、ある者は太鼓を打ち、また花を手に執る者もいる。上方の聖樹と台座を三十三天に居る仏陀の象徴と考え、その左右の6人は仏陀を礼拝する神々とすることができるかも知れない。階段の左右の10人は、仏陀に随従して降下する神々であろう[4]。経典ではいずれも三道宝階としているのに、階段を1筋しか表さなかった理由は不明である。下方の聖樹と台座は地上に降り立った仏陀を象徴し、その左右には2組の子供連れの男女が仏陀を迎えている。この Sāñcī の例は、階段を斜め横の視点から表現し、人物の姿態にも変化をつけていて、Bhārhut の表現よりも一段と進歩していることがわかる。

古代初期の遺品は、この2例のみである。これらでは、仏陀に随従して降下したという Brahmā と Indra とを特定することはできない。また Utpalavarṇā 比丘尼の姿を見ることもできない。この両例は、仏陀が三道宝階を踏んで三十三天より降下し、仏陀を待ちこがれていた在俗の信者たちが迎えたという、この説話の根幹部分のみを図示しているのである。

2 Gandhāra

Gandhāra 地方で作られた仏伝図はおびただしい数にのぼり、主題の多岐にわたる点でも他地方の及ぶところではない。ギリシア・ローマ文化の影響を強く受けて現実的・合理的な思想がおこなわれていたためか、その表現は具体的で、このガンダーラ地方において仏伝図の図像がほぼ確立されたといっても過言ではない。

ガンダーラ出土の「従三十三天降下」図は、今までのところ(1) Victoria and Albert Museum, London[5] (fig. 3) (2) Indian Museum, Calcutta[6] (3) Lahore Museum[7] (fig. 4) (4) Detroit Institute of Arts[8] (5) Prince of Wales Museum, Bombay[9]が各1例ずつ所蔵する5例が知られている。(1)は、中央に3筋の階段があり、右側に Brahmā 左側に Indra を従えた仏陀が上下に3度繰り返して表わされている。階段の左右には、上下6段に計100名以上の人物が並び、上4段に神々、下2段は地上の信者たちである。(2)は、むかって右の Indra の足元以下を欠き、しかも磨滅のはげしい作品である。(1)と同じように中央に垂直に階段があり、ここでは Brahmā と Indra とを従えて降下する仏陀は1度表わされるのみである。仏陀の降下する階段の足元に1人の人物が背中をむけてうずくまり、両手を挙げて仏陀を礼拝している。これは Utpalavarṇā に相違ない。Foucher は、むかって左下の象にのった人物を Udayana 王とするよりはむしろ Utpalavarṇā が姿をかえた転輪聖王と考えるべきであるという。一方、Ackermann は、(1)の左下の馬車に乗る男女を転輪聖王とはせず、Udayana 王と考える。しかしいずれも推定の域を出ず、両者ともに王族の1人としておくのが適当であろう。(3)は、Foucher が"fort miserable"というように、仏陀の足元のみの断片であるが、磨滅は少なく、図柄ははっきりしている。階段を画面の上端から下端まで表わすのではなく、3段のみで、その最上段に仏陀および Brahma と Indra とが立っている。Utpalavarṇā は、Brahmā の立つ階段の前に横向

きに表わされ、片膝を立ててうずくまり、仏陀を合掌している。この(3)の完存例が(4)である。(4)は、恐らくストゥーパを飾っていたと思われる縦長の石板で、上方の⅓以上が三葉形のアーチになっている。多くの画面に区切られ、説法相の仏陀や涅槃を示す画面もあるが、主要部を占めるのは上下3画面にわたって描かれた「従三十三天降下」図である。3画面ともに3段の階段上に立つ仏陀と両脇侍を表わすが、その周囲の礼拝者の姿は少しずつ相違し、1番下の画面にのみ(3)と同じ姿のUtpalavarṇāが登場する。(5)は階段が2段しかない以外(4)とほぼ同じ図柄で、2画面のみであるが1画面は欠失した可能性が強い。下の画面のBrahmāの階段は損傷はげしく、ここにUtpalavarṇāが表わされていたかどうか明らかではない。

以上の通り、Gandhāraには、(1)や(2)のように多数の階段を描出するものと、(4)(5)のように2段ないし3段のみのものとの2種類の表現形式があることがわかった。そして前者の場合は1画面で完結しているが、後者は恐らく3画面構成であったと思われる。今までに知られているこれら5例に関するかぎり、両形式にそれほど年代差があるとは思われず、Gandhāraの石彫の後期、3世紀の作と考えて良い。しかし多数の階段を図示する(1)や(2)はBhārhutなどの古代初期の形式を受継いでおり、(1)の仏三尊を1画面の中に3度繰り返す形式が(4)のように3画面へと展開していったといえるであろう。1画面の中に同一人物を繰り返す手法は古代初期においては好まれたが、Gandhāraではきわめて稀で、三画面へと移行するのは当然の帰結であろう。ところで、この「従三十三天降下」図のような場合に、仏陀を繰り返し表現する必然性はあまり感じられない。インドには、天界、空界、地界と宇宙を3分する考え方があるが、この考え方をこの図にあてはめるのは行き過ぎであろう。結局Foucherのいうように「降下の異なった時間を処理するため」[10]の方策であったとしか考えられない。なお、物語の展開に従って複数の場面を区切って表現するのはインド本土には例がな

く、敦煌の幡画などに見られるこの形式は、このGandhāraの(4)(5)などから展開したものであろうか。

Gandhāraの項を終える前に、Gandhāraと峠を隔して北に位置するSwāt地方より出土した興味ある例[11](fig. 5)を紹介しておかねばならない。これは、イタリア隊の1956−58年のButkara Ⅰの発掘調査により出土したものである。左上から右下に斜めに3筋の階段があり、それぞれの階段の脇には聖樹が立っている。『増壹阿含経』などに説く金樹に相当するもので、金樹を図示するのはこれが唯一の例であろう。中央の階段には仏陀の姿は表わされず、両脇の階段にはBrahmāとIndraとがともに合掌して立っている。むかって左のBrahmāはひげを生やした修業者の風貌をし、右のIndraは頭に髻をゆっている。中央の階段の下端に足跡があり、その前に僧衣をまとい、頭を丸めたUtpalavarṇāがいて、片膝を立ててうずくまり、両手をのばし仏陀の両足に頂礼しようとするしぐさである。この遺跡の出土品は、ほとんどが再使用されたもので原位置より発掘されたものではなく[12]、この作品もその出土した層位を手がかりとして年代決定することはできなかった。また仏陀の姿を表現していないからといって、ただちにこれをGandhāraにおける仏像創始の1世紀末以前とするわけにはゆかない。なぜなら、Swātには仏陀を象徴によって表現する例が数多く、仏像を表現する作品と仏像を表現しない作品との間に明確な様式差異を認めることができないからである。ともあれこの作品の場合、それまで常に垂直に表わしていた階段を、斜めに表現したところに特色がある。

3 Mathurā

Mathurāの「従三十三天降下」図は3点あり、いずれもArchaeological Museum, Mathurāの所蔵である。(1)は仏像不表現の例[13]で、3筋の階段がすそ広がりに放射状に描かれ、下端でUtpalavarṇāがひざまづいて合掌礼

拝している。階段の上方に表わされているのは恐らく仏陀の髪飾りのついた髻（cuḍā）で、そのむかって左のストゥーパ状のものは何かわからない。

(2)は、1つの石板に「誕生」「降魔成道」「従三十三天降下」「初転法輪」「涅槃」の仏伝中の5つの事蹟を右から左へと並べたもので、五相図とでも呼ぶべきものである[14]。「従三十三天降下」のみが四大事と同列に扱われているのは興味深く、四大事を図示する四相図や、四大事に「従三十三天降下」を含む副次的な四事蹟を加えた八相図の例はよく知られているが、五相図はこれが唯一の遺例である。Mathurā は Saṁkāśya に比較的近いところから、この主題が重視されたのであろうか。3筋の階段を下にゆくほど幅広く表わし、最下段に仏陀と Brahmā および Indra が立っている。仏陀は通肩に衣をまとい、右手は施無畏印を結び、左手は肩口で衣の端を握っている。むかって右の Brahmā は仙者のような顔つきであり、Indraは冠をかむっていて、ともに仏陀の方に身体をむけて合掌している。仏陀の足元には Utpalavarṇā がひざまづき、合掌している。その他3人ほどの礼拝者も見分けられるが、この部分は摩耗していて服装などは判然としない。上方には3筋の階段を結ぶように欄楯のような工作物があり、その中に髻その他のものが見える。形式的な衣文の表現などから考えて、3世紀の作であろう。

(3)は、ストゥーパの円形基壇の側面に、「誕生・二竜灌水」「降魔成道」「初転法輪」「涅槃」「堂内に坐す仏陀」（Vogelは「香堂説法」と考える）「四天王奉鉢」「帝釈窟説法」とともに表わされたもので、主題に異同はあるが、のちの八相図の先駆となるものである。全体に摩耗がはげしく、細部は不明瞭である。やはり3世紀の作であろう[15]（fig. 6）。Gandhara の Sikri 出土の小ストゥーパの円形基壇浮彫(Lahore Museum 蔵)との類似が指摘されていて[16]、たしかに画面を区切る柱などはその通りであるが、図柄は Mathurā 独自のものが濃厚である。3筋の階段のうち、中央は垂直であ

るが、左右の階段は中央に傾き斜めになっている。中央の階段いっぱいに仏陀が描かれ、Brahmā と Indra は階段の外側に立っている。Indra は、(2)と同じように、冠をかむっている。階段の上方には、ここでもまた、髻などを図示するようである。Utpalavarṇa はじめ、仏陀を迎える会衆は１人も表わされていない。

以上３点の Mathurā の遺例に共通するのは、その三道宝階の表現である。あるものは階段が下へゆくほど幅広くなり、あるものはすそ広がりに放射状に描かれている。これは長大な階段を示すための遠近法の一種と考えることができるであろう。さらに他地方の遺例にはない図像上の特色は、階段の上に髪飾りのついた髻その他を表わす点である。仏陀（太子）は、出家ののち、剃髪をし、その剃り落した髻を空中に投げたところ、Indra がそれを受取り、三十三天の善法講堂に安置して神々が供養したという話がある。階段の上方に髻を描くのは、そこが三十三天であることを象徴するためであろう。

4　Ajaṇṭā

北インドの Gandhāra や Mathurā で造像活動が盛んであった頃、南インドでは東海岸の Kṛshṇā 河下流域の Amarāvatī や Nāgārjunakoṇḍa で仏教文化が栄え、仏伝図も多数制作されたが、今までのところこの地域から「従三十三天降下」図は１点も発見されていない。一方、西インドでは、Ajaṇṭā の壁画にその遺例がある。

まず第16窟正面廊後壁左端には、「摩耶夫人への説法」と「従三十三天降下」が描かれている[17]というが、剝落がはげしく、図柄の比定さえ困難なほどであるので、ここでは取り挙げない。

もう１つは第17窟（５世紀末頃）仏堂前室左壁にあるもので、「摩耶夫人への説法」「従三十三天降下」(fig. 7)「Saṁkāśya での説法」の３場面を、

区切りを設けないで、上下に並べている[18]。挿図はこの「従三十三天降下」図の中央部分で、仏陀を中心に、Brahmā や Indra やその他の天衆 6 人が表わされている。仏陀や天衆たちの足元には、ずらせて重ねた 2 枚の板があるだけで、長い階段は描かれていない。実はこの 2 枚の板こそが階段なのであって、このような階段は、Gandhāra の第 3 例（fig. 4）などに見た通りである。Ajaṇṭā の画家が、Bhārhut, Sāñcī, Mathurā の中インドで常に描かれてきた長大な階段を採用しないで、Gandhāra と同じ表現形式を用いたのは、きわめて興味深い。Gandhāra と Ajaṇṭā とは年代的にも差があり、距離的にも遠く隔っているため、直接の影響があったと考え難いが、また偶然に同様な表現形式をとったとも思えない。何らかの形で Gandhara の図像が Ajaṇṭā にもたらされたか、あるいは共通の祖型が例えば西方からもたらされたか、そのいずれかを考えざるを得ないであろう。それには階段の表現以外にも類似するものがないかどうか精査する必要があろうが、今のところはこの 1 例を挙げ得るのみである。ふたたびこの壁画に戻って、仏陀の足元には Utpalavarṇā の姿は見えない。仏陀と天衆たちの一群とはやや空間を置いて、左右に仏陀を迎える大勢の会衆が描かれている。むかって右側の会衆の中の椅子にゆったりと坐って合掌する一きわ目立つ貴人の前に、うずくまって両手を差し出し合掌する人物がいる[19]。乳房を豊かに描いていて明らかに女性であることがわかるから、あるいはこれが Utpalavarṇā かも知れない。

5 Gupta 朝以後

5 世紀に入ると、北インドの造像活動の中心はガンジス川中流域の Sārnāth へと移っていった。同時に、彫刻は仏教説話を主題とするものから、礼拝像の制作へと展開していった。この傾向はすでに Mathurā においても認められるところである。ただこれは彫刻のみの現象であって、絵画

は引続き説話を主題とすることが多いのは、Ajaṇṭā や中央アジアの壁画に見る通りである。

Sārnāth では、「従三十三天降下」図は「千仏化現」図とともに作例が多いが、先に述べた通り、説話図的性格は弱まり、礼拝像と呼ぶ方がふさわしくなっている。Sārnāth Museum の１つの例は、５段の階段の一番上に仏立像、そのむかって左に払子と珠数を持つ Brahmā、右に傘を執る Indra を表わしている[20]。法顕や玄奘の説く、Saṁkāśya の宝階上の仏像とは、まさにこのような像容であったのだろう。同じく Sārnāth Museum の八相図[21]中のものでは、階段はなくなり、Brahmā と傘を執る Indra との三尊のみとなり、八相図からこれを独立させれば、まさに礼拝像と呼ぶべきであろう[22]。

これ以後11世紀頃までのいわゆる Pāla 派の彫刻には、Brahmā と Indra とを両脇侍とする仏立像は枚挙のいとまないほどである[23]。ことに降魔印坐仏の光背に小さく表わされた七相図の１つとしての例が多い[24]。

6　日　　本

Gandhāra 地方では５例の「従三十三天降下」図が知られているのに、Haḍḍa や Bāmiyān などのアフガニスタンの諸遺跡からは、１例も発見されていない。中央アジア、中国、朝鮮半島の遺例も筆者は寡聞にして知らない。

わが国の遺例としては、２例が知られている。１つは久遠寺蔵仏伝図三幅（13世紀末）のうちの第３幅の左上方部分に描かれたもの[25]、他の１つは常楽寺蔵釈迦八相図七幅（14世紀）のうちの第６幅に描かれたものである[26]。前者は三道宝階から降り立った仏陀を Udayana 王が造ったといわれる仏像が礼拝し、周囲には Udayana 王や諸天、在俗信者などの会衆が描かれている。一方、後者は、三道宝階を降下中の仏陀と、仏像の礼拝を受

ける仏陀とを同図中に描いているが、在俗の信者たちの姿はない。この両者は、最初に述べた『増壹阿含経』などに説く Udayana 王所造の栴檀瑞像の伝説をさらに展開させたものといえよう[27]。

Ⅳ むすび

以上の「従三十三天降下」図を通覧すると、(A)登場人物の非較的多いもの——Bhārhut, Sāñcī, Gandhāra (1)および(2)、Ajaṇṭā——と、(B)登場人物が少ないもの、との2つに大別し得ることに気づくであろう。(A)は、仏陀が多数の天を従えて三道宝階を降下し、久しく仏陀の姿を見なかった国王、大臣、人民などの在俗の信者たちが大挙して迎えた、といういわばこの説話の根幹を表現したものということができる。ただ Gandhāra (2)は例外で、次の発展段階を示す Utpalavarṇā の礼仏を含んでいる。また制作年代の降る Ajaṇṭā を除き、多数の段よりなる宝階が画面中央に垂直に表わされるのも、このグループに共通している。次に(B)はさらに3つに細分することができる。(B)—1は Utpalavarṇā の礼仏に重点を置くもので、Gandhāra(3)および(4)、Swāt, Mathurā (1)および(2)がこれにあたり、いずれも3世紀の制作と考え得るものである。仏陀に従う天や仏陀を迎える信者の数が減り、比丘尼の姿が目立つ図柄であるが、個々の事象の表現形式は多様化している。これは仏伝図の制作が一般化し、各地で造形活動がおこなわれるようになるとともに、地域差も生じてきたのであろう。(B)—2は、仏陀と Udayana 王所造の仏像との対面を主題とするわが国の2例で、これはむしろ中国や日本で発展をみた図像であろう。(B)—3は Mathurā (3)、Sārnāth 派および Pāla 時代の諸例で、彫刻が説話図の表現手段としては用いられなくなり、ストゥーパにかわって仏像が礼拝対象となってゆく時代性を反映しており、インドでは5－6世紀以後は新しい図像は展開せず固定化するのみであったことを示している。

注

(1) この仏伝図の主としてガンダーラの遺品のみに限った考察は、下記の２つがある。A. Foucher, *L' Art greco-bouddhique du Gandhāra,* tome premier, Paris, 1905, pp.537-540; C. L. Fabri, "A Graeco-Buddhist Sculpture representing the Buddha's Descent from the Heaven of the Thirty-three Gods," *Acta Orientalia,* VIII. 4, 1930, pp. 288-293. また小野玄妙『仏教の美術及歴史』東京、大正５年、pp.22-26, 383-386 にも簡単な紹介がある。

なお、小稿のために貴重な資料をお貸し下さっ宮治昭氏に深く感謝いたします。

(2) 「……自在天子即化作三道金銀水精。是時金道当在中央。俠水精道側銀道側化作金樹。……是時梵天在如来右処銀道側。釈提桓因在水精道側。……是時優鉢華色比丘尼還隠其形。作転輪聖王形七宝具足。……復本形作比丘尼礼世尊足。……」大正蔵経第２巻 pp.707 b—708 a 。

(3) A. Cunningham, *Ancient Geography of India,* reprint edition, Varanasi, 1963, pp.311-314.

(4) Sir John Marshall は、階段の右で、左手に蓮華を執り右手にスカーフを持って振り上げているのは Brahmā かも知れないとする。Sir John Marshall, *A Guide to Sanchi,* 3rd ed., Delhi, 1955, p.62. しかしこれを Brahmā とする図像上のきめてはない。

(5) No. I. S. 11-1940. 49.5 x 57cm. C. L. Fabri, *op. cit.;* Hans Christoph Ackermann, *Narrative Stone Reliefs from Gandhara in the Victoria and Albert Museum in London*, (Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente, *Reports and Memoirs,* XVII), Rome, 1975, pp.132-133 and pl. LVIII b.

(6) No. 5105. h. 41cm. Loriyan Tangai 出土。A. Foucher, *op. cit.,* pp. 539-540 and fig. 265; N. G. Majumdar, *A Guide to the Sculptures in the Indian Mseum,* Delhi, 1937, part II, pp.55-56.

(7) No.1133. A. Foucher, *op. cit*., p.537.

(8) A. K. Coomaraswamy, *History of Indian and Indonesian Art,* Dover edition, New York, 1965, pl. XXV(91).

(9) No.35. 47 x 35cm. A. Foucher, *op. cit*., pp.537-538 and fig.264; Moti Chandra, *Stone Sculpture in the Prince of Wales Museum,* Bombay, 1974, pl.38. Moti Chandra は、その図版解説（pp.15-16）において、舎衛城の大神変の時の"the creation of the jewelled terrace"であるとする。

(10) A. Foucher, *op. cit*., p.538.

(11) Swat Museum 蔵。36 x 34cm. Domenico Faccena, *Sculptures from the*

Sacred Area of Butkara I (Swat, Pakistan), part 2(IsMEO, *Reports and Memoirs*, vol. II. 2), pl. CCXXXIII.

(12) Maurizio Taddei, *India (Achaeologia Mundi* series), Geneva, 1970, p.84. なおButkara Iの出土品の様式による編年は、D. Faccenna, *Sculptures from the Sacred Area of Butkara* I (IsMEO, *Reports and Memoirs*, II. 1)に発表される旨、以前から予告されているが、未だ刊行されていない。

(13) No. 39. 2068. Gāyatrī ṭīlā 出土。N. P. Joshi, *Mathura Sculptures,* Mathura, 1966, p.64 and pl. 28; 拙稿「インドの仏伝美術」『南都仏教』35号、昭和50年、図17。

(14) No. H. 1. 66 x 106cm. J. Ph. Vogel, *Catalogue of the Archaeological Museum at Mathura,* Allahabad, 1910 (reprint edition, Delhi and Varanasi, 1971), p.125 and pl.VI(a); *do*., *La Sculpture de Mathura* (*Ars Asiatica* XV), Paris et Bruxelles, 1930, pl. LI a; 拙稿「インドにおける仏誕生の図像」『美術史』Nos. 90-92、昭和51年、挿図4。

(15) No. N. 2. ストゥーパ基壇 h. 27cm, d. 62cm. J. Ph. Vogel, *Catalogue*, pp.166-168; *do*., *Sculpture*, p. 93; V. A. Smith, *Jain Stupa and other Antiquities of Mathura,* Allahabad, 1901 (reprint edition, Varanasi and Delhi, 1969.), pls. CV-CVII.

(16) A. Foucher, "Les bas-reliefs du stūpa de Sikri (Gandhāra)," *Journal Asiatique,* X-ii, 1903, p.323.

(17) G. Yazdani, *Ajanta,* part 3, Oxford, 1940, pls.XLVI(a) and XLVII.

(18) *ibid*., part 4, Oxford, 1955, pls.XXXVIII-XL(a); 高田修・田枝幹宏『アジャンタ』東京、昭和46年、図35—38および別図11。

(19) 高田・田枝上掲書　図35左はし。

(20) Daya Ram Sahni, *Catalogue of the Museum of Archaeology at Sarnath,* Calcutta, 1914, no. c(a)18, h.38cm. 5世紀頃。さらにカルカッタのIndian Museumに2例ある。

(21) No.261, 100 x 65cm. 5世紀頃。Sahni, *Catalogue,* no. c(a)3, pl. XIX(b); 上掲拙稿「インドの仏伝美術」図20。

(22) このような三尊像の5—6世紀の遺品は、Sarnath Museumに2例ある。Sahni, *Catalogue*, nos. c(a)19 and 20.

(23) その代表例として、Patna Museum, no.23, Lakhisarai 出土、h.168cm., 11世紀(*Catalogue of Buddhist Sculptures in Patna Museum,* Patna, 1957, pl.XI)および同館no.9591, Kurkihar 出土、h.86cm. ブロンズ、10世紀（*ibid*., pl.XX)を挙げておこう。

(24) 上掲拙稿「インドの仏伝美術」p.109および図21。

(25) 京都国立博物館監修『日本の説話画』京都、昭和36年、第８図。高田修・柳沢孝『仏画』（小学館『原色日本の美術』７）東京、昭和44年、第18図。

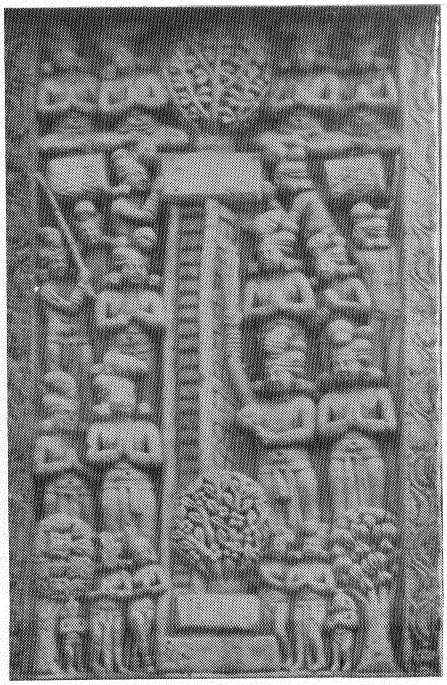
(26) 高田修『仏像の起源』東京、昭和42年、挿図2ｂ。

(27) Gandhāra に Udayana 王が仏陀を示す浮彫があるが、この場合、仏陀は説法相で結跏趺坐し、三道宝階は図示されていない。Peshawar Museum, no.1534, h.30.5cm, Sahri Bahlol 出土。I. Lyons & H. Ingholt, *Gandharan Art in Pakistan,* New York, 1957, fig. 125.

（文学部講師）

fig.1

2nd panel, Ajātasátru pillar,
Bhārhut early 1st century B. C.
Indian Museum, Calcutta
photo: T. Koezuka



top pannel, north face, west pillar,
north gate, Sāñcī I
early 1st century A. D.
photo: T. Koezuka

fig.2

fig.3 Gandhāra 3rd century A. D.
Victoria and Albert Museum, London (Ackermann, pl. LVIII b)

fig.4 Gandhāra 3rd century A. D. Lahore Museum
photo: Mr. A. Miyaji

Swāt
2nd-3rd century A. D.(?)
Swat Museum
photo: T. Koezuka

fig.5

fig.6 stūpa drum, Mathurā 3rd century A. D. Mathura Museum
photo: T. Koezuka

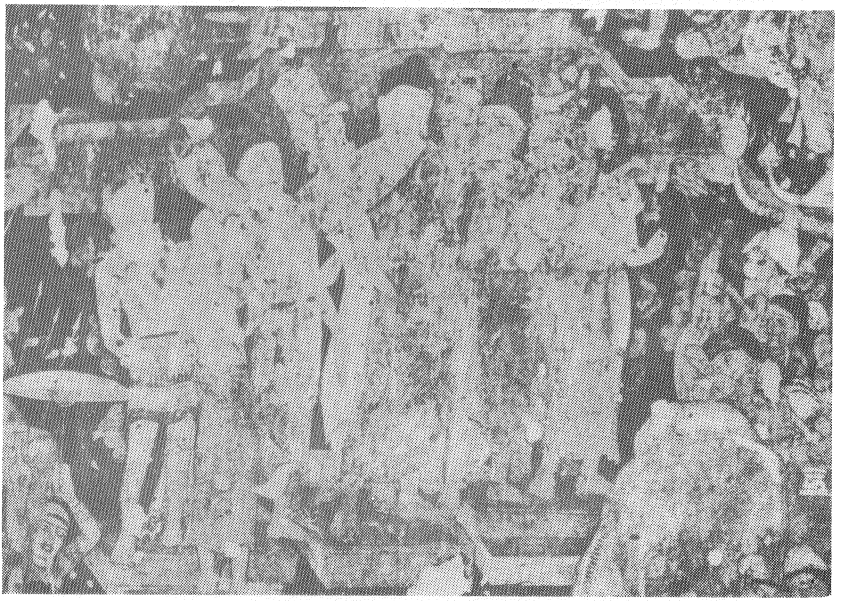


fig.7 Ajaṇṭā Cave 17 end of 5th century A. D.
(Yazdani, part 4, pl. XLVII)